

佳作

『大村智物語：ノーベル賞への歩み』 馬場錬成著

文学部 文学科 4年 大木夏子

2015年、ある学者がノーベル生理学・医学賞を受賞した。自身の祖母の言葉「人のためになることを考えてやりなさい」を教訓に、熱帯地方で流行していた重い感染症の特効薬イベルメクチンを開発、病に苦しむ約3億人の人々を救ったという。受賞会見に臨むこの偉大な学者・大村智博士の姿からは、学者らしい威厳よりもむしろ親しみやすい人柄がうかがえた。

それまでノーベル賞学者の半生といえば、幼少期から優等で通して、黙々と学問に没頭してきたという印象を抱いていた。だが大村は何と、元々勉強は二の次のスポーツ少年だったという。そんな大村を研究の道に誘ったものを知りたい、という衝動に駆られ手にしたのが本書である。彼の業績を広めるために刊行された実録伝記だ。

冒頭で大村から若者への「努力をすれば報われる」という応援の言葉が紹介された後、山梨の裕福な農家で育った幼年時代、野良仕事を手伝いスポーツに明け暮れた少年時代、第二志望として合格した山梨大学での学生時代のエピソードが綴られていく。人生の転機は夜間高校の教師となり、労働の傍ら通学する生徒たちの姿に感化された瞬間だった。これをきっかけに大村は、勉強よりもスポーツを優先してきた自身を省み、学び直しを決意する。東京理科大学大学院に進学し、研究者への道を歩み始めたのだ。それは多くのノーベル賞学者が辿る「優等生」の経歴ではない。それでも「夜間高校教師」という経歴なくしてこの偉大な学者は誕生しなかった。労働により汚れたままの手で試験問題を解く夜間の生徒たち。彼らの学問への真摯な取り組み方が大村を衝き動かした瞬間、彼らの努力は一つ、実を結んだのである。

また、聡明で理解力のある文子夫人との出会い、留学先での恩師や研究者仲間との交流の描写には胸があたたかくなる。感染地帯の人々を苦しみから解放できたのは、大村の思いやり深い人柄と、並外れた研究意欲を支えてくれた人々があったからこそであろう。そんな大村の半生から学べるのは、失敗を恐れるなということだ。大村は研究者として、万一の時には自ら泥をかぶる覚悟で研究に打ち込んだという。その誠実さが多くの人脈を作り、壁に直面した際にも周囲の助けを得られた。大切なことは失敗を恐れるよりも、失敗した時に手を差し伸べてくれる人が存在するかなのである。勿論大村は、自身が指導者の立場になった際には、後輩たちへ惜しみない援助を送ったのだ。

努力は報われる、と自信を持って言うのは難しい。だが経験、知識、仲間といった、努力をする過程で得たものはその後の人生できっと助けになる。大村の「努力をすれば報われる」という言葉にはそのような意味もあるのだろう。周囲への温情を忘れず何事にも最善を尽くすことが、自分を、同時に他人をも救うことにつながる。それを証明した大村の生き方は、もうじき大学卒業を控える私にとっての座標軸となってくれた。